

Special Essay

研究のスタートと医学図書館

新病院長 中島 格

「嗅覚に関する研究を始めて欲しい」。思いもかけないテーマを与えられたのは、初めての海外留学でアメリカの土を家族3人で踏み、時差が完全にぬけない2度目の話合いの時であった。耳鼻咽喉科分野の中でも喉頭の免疫病理を研究していたので、留学先の主任教授からはそれに関連する研究を指示されると判断し、渡米する前に関連文献を集めて研究計画を立て、予め郵送していただけない、「嗅覚」というテーマに一瞬自分の耳を疑ったものである。

与えられたテーマは絶対である。その後、留学先のペンシルバニア大学耳鼻科に” Smell and Taste Center”なる部門がNIH 研究費で設置されたことも知り、ともかく何かを始めねばならない事を悟った。それからの3ヶ月間は無我夢中であった。茫然としながらも、色々な所へ足を運び、色々な人に会い、色々な情報を得ようともがいていた。

まず、具体的なテーマを決めねばならない。考えてみれば、耳鼻科医でありながら嗅覚に関しては殆んど知らない。逆に言えば、嗅覚に関する研究も限られているだろうと独断し、大学構内の医学図書館文献サービスデスクを訪ねた。パソコンの進んだ現在と違い、当時（1982年）の文献検索は専門の施設に依頼して、約1週間後に用紙に打ち出したものを受け取っていた。「におい」に関する用語を2-3語入れて、過去20年間の全資料をコンピュータで取り寄せることにし、1週間後の結果を待った。せいぜい数10編とタカをくくっていた私の前には、厚さ10cm以上にもなる論文と抄録の印刷された資料の山であった。暗然たる想いにかられつつ、係員のアドバイスに従って分野を絞って再調査することにした。それにしても、自分の無知を思い知らされた。自分が知らぬばかりのことで、薬理学、生理学、形態学を中心に、再生可能な脳神経のモデルとして半世紀以上も前から無数の研究がなされていたのである。気をとり直して、今度はヒト嗅粘膜や嗅覚障害の臨床研究に関する文献検索の結果を待った。数日後手に入れた結果は厚さが1cmにも満たないものであった。医師である以上、嗅覚障害の臨床的研究を始めようと決めた所以である。

もう四半世紀以上昔のことになるが、見知らぬ海外の地で、たった一人で研究をゼロからスタートさせた自分を奮い立たせてくれた医学図書館に対する、郷愁を交えた愛着感は今も消えることはない。

